

研究紀要

第 11 号

1994

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



大久保領家庵寺（第1段階）



西別府庵寺金草系（第4段階）
交叉鉢齒文縁軒丸瓦同范例1



金草窯 I (第3段階)



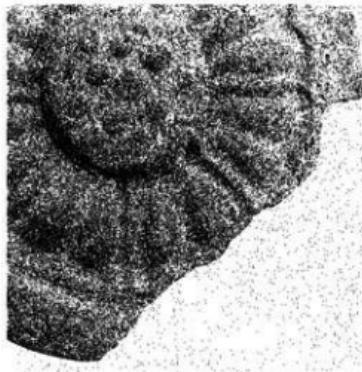
城戸野高寺 (第5段階)



西別府庵守西戸丸山系 (第2段階)



金草窯 I (第3段階)



毛樹原庵寺 (第3段階)

9



金草窯 II (第4段階)

5

交叉鉛文縁軒丸瓦同范例(2)

目 次

序

方形周溝墓と土器 I

福田 聖 1

埼玉県におけるカマド導入期の様相

—カマド、大型甑、壺の形態を中心として—

末木 啓介 55

関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会

田中 広明 83

末野窯跡群産須恵器の胎土と生産

—流通に関する基礎事項—

岩田 明広 117

瓦当範の移動と改範とその背景

—武藏・上野に分布する交叉鋸歯文縁軒丸瓦の変遷から—

酒井 清治 145

埼玉県における古墳関連碑文

大谷 徹 163

新羅・伽耶における横穴式石室の展開

—慶州・陜川を中心にして—

岡本 健一 187

新羅・伽耶における横穴式石室の展開

—慶州・陥川を中心にして—

岡本 健一

要約 新羅や伽耶において横穴式石室が導入されたのは、朝鮮半島では最も遅く、6世紀前半から中葉になってからのことである。新羅による伽耶地域の支配を契機として、横穴式石室といわゆる新羅系土器が伽耶に広まったという、從来よりの一元的な考え方を再検討するため、新羅は慶州を、伽耶は陥川を中心にして、それぞれの地域の石室の分類や出土土器の編年を行った。その結果、6世紀後半以降、伽耶を含む慶州以外の地域では、小規模な石室が広範囲の人々に普及しているのに対し、慶州では規模や構造においても優れた石室が限定された範囲で築造されていたことがわかった。土器については新羅と伽耶とはやや違った展開を示しており、朝鮮半島における土器の統一化の過程である程度の地域性が認められた。しかし7世紀後半になるとより強い支配力が伽耶故地におよび、古墳築造の縮小化や土器様式の統一が行なわれたことから、半島統一を可能にした、強力な王権による国家体制の成立の一面が、墓制にも反映されていると考えた。

1 はじめに

朝鮮半島において、横穴式石室は三国時代以降の中心的な墓制であった。しかし地域ごとにみるとその受容や展開の様相には相違が大きい。横穴式石室は高句麗では中国や楽浪の影響を直接受けて、4世紀初頭には成立し、5世紀には百濟にも伝播したとされる。しかし、新羅や伽耶の地（ここではおおよそ現在の慶尚道を指しておく）では、やや時期が遅れて6世紀にならないと本格的な築造がはじまらない。高句麗から新羅に伝播し受容されるのになんと200年以上もかかっているのである。一方、日本の九州地域ではすでに4世紀代につくられはじめているのだから、その伝播速度の違いは注目される。

新羅・伽耶地域における横穴式石室の研究が從来あまり進んでいなかった理由としては、発掘調査例の少なさが挙げられる。しかし最近では、この地域の古墳が数多く調査されるようになり、古墳群としてのまとまりで報告されることもしばしばである。資料の数は決して十分ではないが、後述するようにここ数年来、この地域の横穴式石室を扱う論文が増え、少しずつ成果が蓄積されつつある。本論ではこれらの成果を踏まえつつ、出土土器の編年を中心にして年代を設定し、遺体の安置方法などの観察を通して横穴式石室受容の意味を考えながら、新羅と新羅に支配されていく伽耶地域の石室の展開過程を考察する。新羅による半島統一への過程という政治的な動向が、墓制の変化にどれほど反映されているのかを示していきたい。

紙数の関係や筆者の能力不足から今回は、新羅の中心地慶州と、伽耶の中でももっとも横穴式石室の報告例が多い陥川地域の古墳を主として取り上げた。しかしいずれも新羅と伽耶の関係を論じる上で重要な地であり、論考の趣旨を十分満たしていると考える。

2 慶州における横穴式石室の様相

(1) 従来の研究

慶州はいうまでもなく、新羅の中心地であり、現市街地にある王陵群をはじめとして、周辺の山地にも多くの古墳があることが知られ、山地の古墳はほとんど横穴式石室を主体部にもつといわれている。しかし発掘調査が行なわれた古墳は数少なく、副葬品の内容ばかりではなく石室の構造すらも不明のものがほとんどである。古墳群単位でまとまって調査され、報告されているのは、戦前の忠孝里古墳群が唯一という現状である。またたとえ調査されたとしても、盗掘が激しく、副葬品の残存量がきわめて少ない。石室からの出土遺物が少ない百濟でも、武寧王陵や笠店里古墳のように未盜掘墳で豊富な遺物が出土した例をみれば、時期の違いはあるにせよ、慶州の横穴式石室内にも副葬品が豊富にあったものと考えてよいだろう。

ここでこれまで発表された新羅の横穴式石室についての論文を簡単にまとめておきたい。伊藤秋男は皇南洞151号墳の「横口系竪穴式石室」の検討をもとに横穴式石室の導入について考察した。6世紀中・後期になって、まず平地の古墳から導入され、山地に移っていったとし、横穴式石室の伝播は仏教の伝来と一体となっていたとした。また他の論文では、洛東江流域つまり新羅に包括された伽耶在野勢力が慶州門閥勢力に浸透した結果ということを追加した。平地から山腹への立地の移動は武烈王(654~660)の陵が西岳洞に所在することから、6世紀末から7世紀前半にかけて婚姻関係や骨品制における変化を背景にしていると考えた。

任世權は石室を形式分類して、平地から山地へ移動することを前提に形態変化による編年を行ない、右狭道型→中央狭道型→左狭道型に、屍床は中央→左右→右と変化するとした。また統一期の王陵についても言及し、封土周囲の護石の形態で分類し、無施設型→自然石型→長台石築型→板石型に変化するとした。

崔秉鉉は自己の後期新羅様式土器の編年観をもとに、石室出土の土器について編年を行なった。石室には長方形プラン→正方形プランの変化があり、長方形のものは南部地方で在來の竪穴式石室に横穴式アイデアが結合したもので、初源を林堂洞や水精峰におく。正方形プランは6世紀中葉に新羅が漢江流域に侵入した際に直接接して、これを導入し、嶺南地方の方形石室は新羅によって先導されたと考える。また狭道位置は同時に発生しているため編年の基準とはならず、導入における系統差とする。つまり右狭道は百濟、中央狭道は高句麗、左狭道は順興にルートを探っている。年代については伊藤秋男とは大きく異なっている。新羅における石室の採用の背景は、法興王による520年の律令頒布や527年の仏教公認が契機となって、積石木槨墳の厚葬から横穴式石室という薄葬に変化したと考えた。

曹永鉉は韓半島の石室を考察するなかで、慶州に広く分布する方形プランで穹窿状天井をもつた石室を忠孝里式とし、その系譜については直接つながる先行形式はなく、隣接地域の石室から部分的な要素を採用して、独自的な方式で築造したものとした。

洪灌植は伽耶・新羅の石室を大伽耶滅亡前後で分類方法を変えて、形式を細分している。また横口式石室の分類も行なっているが、分類が細部にわたっているため、やや煩雑な感が免れない。

東漸はこれまであまりまとまっていた高句麗の横穴式石室について多くの紙数を費やしな

がら、朝鮮半島全域における横穴式石室を概観している。この中で新羅の横穴式石室を「双床塚型」（穹窿天井、両袖、甬道、漆喰）、「忠孝里型」（穹窿天井、片袖）にわけ、後者は於宿知述干墓のような石室の影響でつくられ、6世紀後半以降の真興王の領域拡大と軌を一にすると考えている。前者は後者から7世紀末ころに発達し、統一新羅の支配者層の墓として存続したとする。また半島東海岸や小白山脈地域では高句麗と新羅の文化が混在している状況がみられるようである。

姜仁求は文献を通して、新羅の古墳の年代を考察している。その中で横穴式石室の導入については、とくに隋や唐との交渉記事をとりあげ、国内の諸制度整備とともに、中国からの影響を強調している。

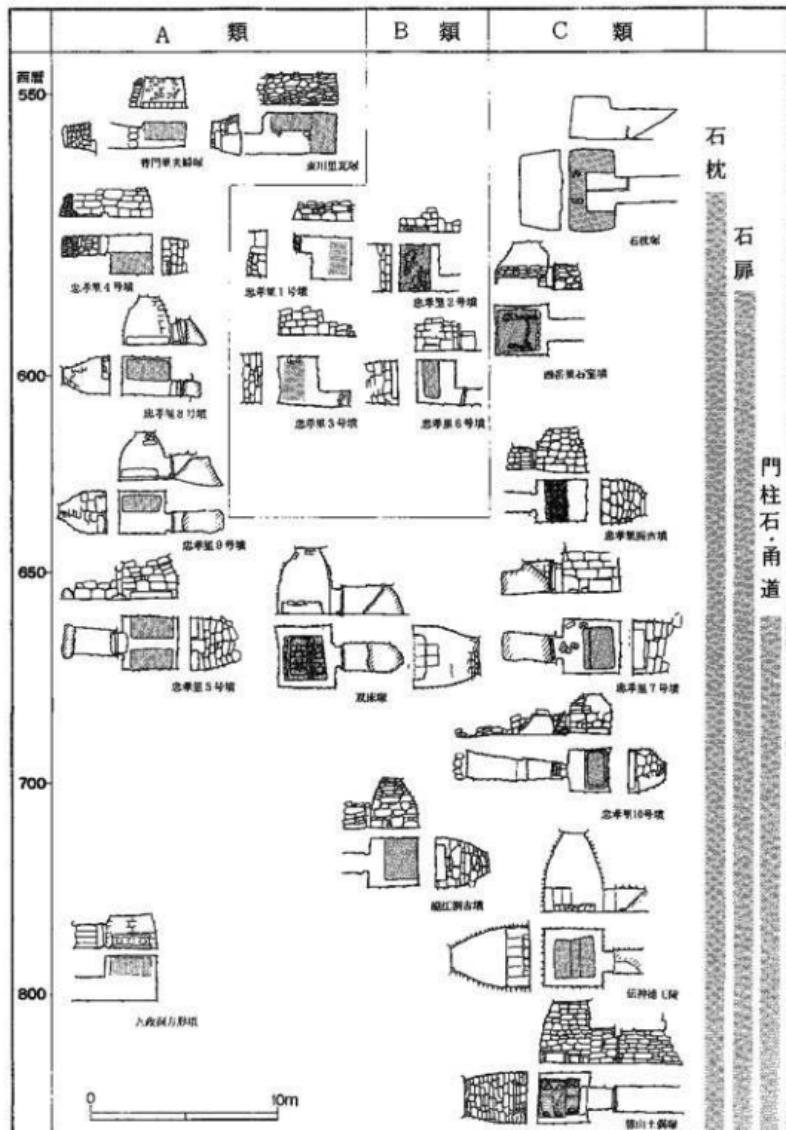
以上、新羅において横穴式石室が普及した背景としては、仏教公認や家族体制の変化、律令頒布、真興王による領域拡大、中国との交渉などの政治的な動機が考えられているが、それらの社会的変化と石室の導入がどのような有機性をもっているのか具体像が明らかではない。

(2) 横穴式石室の分類（第1図）

上述の各論文ではそれぞれ型式分類が行われているが、あまり細かい分類は石室の発展過程を整理するためには適当ではないと考える。立地や石材の違いによって細部的な面では、構造上かなりの変動があるだろう。型式を決定する重要な要素は、どこから伝播したのかという点と、どのような葬法で埋葬するかという点にある。慶州における横穴式石室が、他国によって支配されて強制された墓制ではない以上、慶州の人々の思想が横穴式石室を導入する段階で直接反映していると考える。墓制というのは非常に保守的なものであると想像されるからである。

まず石室の平面形態をみると、A類：片袖式縱長方形、B類：片袖式横長方形、C類：両袖式正方形に分ける。これは後述するように、遺体の安置方法のちがいをも示している。なお左片袖（本文では日本での通例のとおり、玄室からみて右に袖を有するものを右片袖といい、韓国での葬道からみた左右とは異なる。）と右片袖を分類して考えることには同意できない。それは形態的な見た目による相違であって、根本的な葬法による違いや、石室建築集団の違いなどが見られないことが理由である。

慶州A類は慶州で最も早く取り入れられた形態で、普門里夫婦塚→東川里瓦塚と変化するが、これらは平天井型式である。このような形態の石室は現在のところ普門里夫婦塚と東川里瓦塚の2基がみられるのみで、その後の時期には継続しない。やや形態的なギャップがあるが、次の段階で穹窿状天井の要素が加味され、忠孝里4、8、9号墳に見られるような石室があらわれる。これらは屍床が主軸と平行してつくられているのが最大の特徴である。忠孝里8号墳からは石扉が付き、忠孝里9号墳では門柱石（玄門部で側壁にある突起）が、忠孝里5号墳では石扉の軸受石もみられる。なお忠孝里5号墳は両袖式であるが、主軸に平行した屍床を2基もつことからA類とC類との中间的な形態といえる。九政洞方形墳は屍床側面に格狭間を刻み、門柱石がすでに甬道化しており、忠孝里5号墳からの空白は大きい。この類型の石室は普門里夫婦塚や東川里瓦塚では基本的に百濟の影響を受けていると考えているが、忠孝里ではさらに高句麗の穹窿天井の形態が加わったものと考えておきたい。



第1図 慶州における横穴式石室の変遷

慶州B類は上のA類と平面形態では類似するが、屍床が主軸と直交するのが特徴であるが、現在のところ忠孝里古墳群でしかみられない。石枕はみられないが、忠孝里2号墳や3号墳のように瓦を屍床に置くこともあり、石枕の代わりをしていたようである。石扉は忠孝里3・6号墳でその初期的な様相がみられるが、門柱石はみられない。比較的早い段階でつくられなくなつた類型の石室であろう。石室の構築方法自体はA類と同じなので、系譜も同様と考えてよいだろう。主軸直交屍床は百濟や高句麗ではほとんどみられない方式であるが、安東造東洞の豊穴系横口式石室では、奥から順々に追葬していったようすがみられる。B類には忠孝里1、2、3、6号墳がある。

慶州C類は慶州においてもっとも盛んにつくられた石室である。これは典型的な慶州様式の石室ということができる。東洞のいう「双床塚型」に相当する。特徴としては、穹窿天井である、屍床が主軸と直交する、屍床に石枕や石足座が設置される、玄門に突起あるいは甬道がつくられ石扉がつけられる、などを挙げることができる。石枕や石足座はこのC類にのみみられる要素で、この類型の特殊性を指摘できる。石扉は西岳里石室墳から、門柱石は忠孝里庵古墳から、さらに馬塚や伝神德王陵では門柱石から甬道に変化する。また天井が相対的に高くなる傾向がある。いわゆる王陵とみられている市街地内の平野地域に分布する大型の石室は、やっぱりこの類型である。忠孝里7、10号墳、破壊墳、西岳里石室墳、双床塚、馬塚、龍河洞古墳、伝神德王陵、獐山土偶塚がある。石枕塚のみ形態が異様であるが、B類の石室と遺体安置方法や石室構築技術上でも共通している。

これらの石室とは別に、豊穴式石室の伝統を引き継いだ横口式石室が慶州市西郊外にある新院里古墳群で検出されている。規模としても非常に小型で上述した石室とは格段の相違がある。このような小型の石室は慶州市南郊外の中山里古墳群でも群集してみられるよう、今後事例が増加するであろう。

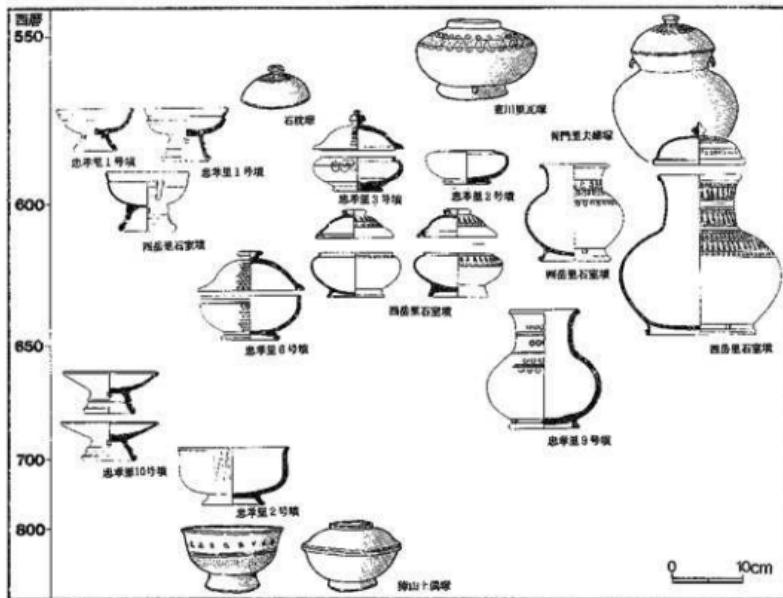
当時すでに新羅の影響を強く受けていたとされる榮州や安東などでは、於宿知述干墓を代表とする、横長方形あるいは方形の平面をもち、羨道が玄室よりも一段高くなり、屍床が羨道床高ほどに高くなつた石室がつくられる。壁面の存在や地理的環境から高句麗との関連も説かれている。東洞は順興壁画墓を579年、於宿知述干墓を595年に想定している。

蔚州では華山里や溫山古墳群で横口式石室、横穴式石室が検出されているがいずれも残存が悪く、詳細な構造を知ることはできない。ほぼ正方形石室、長方形石室、小型石室の3類に分けられるようであり、いずれも片袖あるいは袖無しであり、両袖式は見当らない。また華山里では隅角がカーブを描く石室があるが、残存不良で詳しくは不明であるので除外する。

(3) 橫穴式石室から出土した土器（第2図）

石室の編年を行なう際にもっとも有効な手段は、出土遺物を編年することであるのは言うまでもない。しかし横穴式石室は盗掘されやすい、追葬が行なわれる、など編年作業上不利な点も多い。よって土器の年代がそのまま古墳の築造時期を示さなかつたり、多くの時期の土器が混在したりすることがあり、常に留意しなければならない問題である。

慶州の横穴式石室から出土した遺物は非常に少ない。また追葬による土器の供献によって、土器の型式がそのまま石室の年代とはならないことが、従来の墓制であった積石木樋墳とは大きく異なる



第2図 慶州の横穴式石室から出土した土器の編年

るところである。土器の編年については、金元龍や崔秉鉉、宮川積一が試みているが、資料自体が少ないとから、具体相を明らかにすることは難しい。崔秉鉉は印文花などの文様を中心として編年案を組み立て、基本的な方向を指示しており、宮川積一も文様に対するより詳細な型式学的の考察を行って、統一新羅期の土器を体系的に編年している。

慶州の古墳から出土した土器を具体的に見ていくことにしよう。慶州の土器の年代を考える上で重要な役割を果たすのは、皇龍寺と雁鴨池から出土した一連の土器群である。しかし報告書内に層位的な説明がなく、出土した状況がよくわからないので、共伴関係が明確でないという難点がある。また磐山上偶塚の甬道天井に描かれていた「大中」という字が、唐の年号（847～859年）を示すすれば、出土した土器は9世紀中ころのものと想定することができる。

最も土器を多く出土した古墳は、西岳里石室塚で、追葬を含めて2時期の土器があると考えられている。小さいほうの台付長頸壺と高壺が第1次の副葬品である。これは日本の出土品との比較をおこなった小田富士雄によって、6世紀末の年代が与えられている。東川里瓦塚からは台付短頸壺が出土しているが、形態的に西岳里石室塚の追葬時のものや、忠孝里3号墳のものよりは古いようである。忠孝里1号墳では無蓋高壺が2点出土しているが、皇龍寺整地層（569年以前）出土の高壺に近いものがあり、7世紀に入るとほとんど無蓋高壺がみられなくなることから、6世紀後半とした。高台壺は文様や器形から忠孝里6号墳→双床塚→龍江洞古墳→磐山上偶塚の順となるようであ

る。江浦洋や崔秉鉉、宮川禎一の編年案からみるとそれぞれ7世紀前半、7世紀中葉、8世紀前半、9世紀中葉となるであろう。

以上、土器の編年から古墳の年代を推定するとつぎのようになる。6世紀中葉—普門里夫婦塚(婦人)・東川里瓦塚、6世紀後半—西岳里石枕塚・忠孝里1・3号墳、6世紀末~7世紀初頭—西岳里石室塚・忠孝里2・6・8号墳、7世紀前半—忠孝里9号墳、7世紀中葉—双床塚・忠孝里5・7号墳、7世紀後半—忠孝里10号墳、8世紀前半—龍江洞古墳、9世紀中葉—獐山土偶塚。

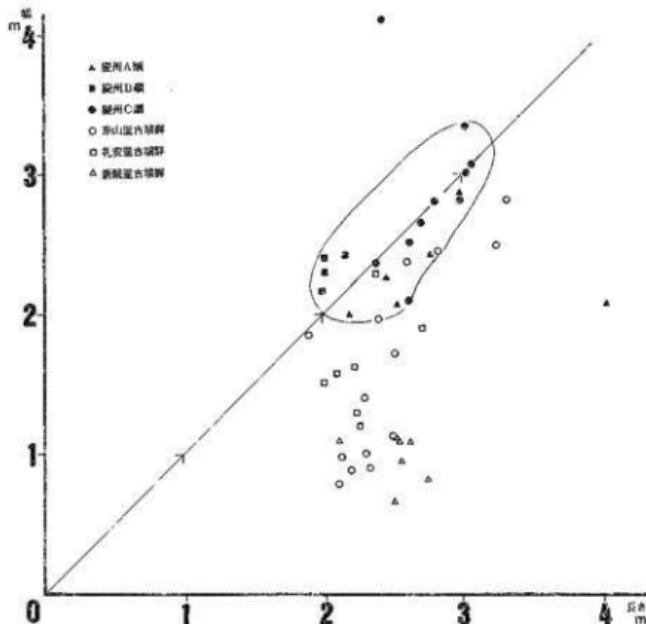
慶州の古墳から出土する土器と、慶州以外の新羅包括地域の古墳から出土する土器を比較すると、前者は印花文を駆使し、装飾性に富んだ土器を中心とするなどの特性が看取される。これはおそらく古墳副葬用として特別に作られたもので、生活用としては皇龍寺下層などから出土する、文様の控えめな土器が使われていたものと考える。それは慶州以外の新羅包括地域の古墳では装飾が少ない土器を中心に副葬していることから、古墳に副葬される土器においても、慶州とその他の地域との格差が顕在していると考えられる。

他に慶州市内の横穴式石室から出土した土器の器種は、高環A類や蓋A類、高台壺、長頸壺、短頸壺などで(第5図参照)、後述するように洛東江西岸地域で盛行する高環B類や蓋B類はみられない。ところで、慶州市の西郊外にある新院里古墳群では、小型の竪穴式石棺や横口式石室が調査された。報告書では出土した高環を編年するにあたり、本稿でいう高環A類からB類へ、また蓋もA類からB類へ変化している。このことから高環A類が短脚化したもののがB類であると理解されるであろうが、伽耶地域の項で後述するように単純には割り切れない。また新羅独特の器種とされる付加口縁長頸壺は、横穴式石室の時期にはあまり副葬されていないが、前時期の積石木棺墳からは多く出土するので、慶州で発展し普及した土器であることは、禹順姬も述べているとおりであろう。

(4) 石室規模の比較

ここで慶州およびその周辺の横穴式石室の規模を比較してみたのが第3図である。慶州市内の報告されている石室を上述したように、A・B・C類に分類すると、傾き1.0のラインを境に3つのグループに明確に分離するが、注目されるのはそれぞれのグループ内での格差が意外と小さいことである。また忠孝里古墳群内の古墳はいずれの類型の石室をみても、あまり規模の相違がみられない。これは周辺地域の古墳群が、小型の石室から大型の石室まで、大小さまざまな石室が見られるのと比較すると明確な特徴である。C類の石室は後に定型化するのであるが、その規模は約3m四方を中心にして、ほとんど格差がない。これは新羅の中心勢力による官僚的支配が及んでいる慶州においては、古墳築造に政治的規制力が働いているからで、古墳を築く身分も横穴式石室が導入された時点ではほぼ限定されていたと言ふこともできよう。

さて慶州周辺の石室をみることにする。新院里古墳群では横口式石室を中心とした小型の古墳がつくられている。表でみると長さ3m、幅1mの間にほぼおさまるような分布を示している。これは同古墳群内にある竪穴式石棺より発展したもので、追葬がほとんど行なわれない。どの石室も小規模で、副葬品にも格差がみられないことから、安定した均質な階層の集団によってつくられ



第3図 慶州およびその周辺の横穴式石室の規模

た古墳群であることがわかる。蔚州華山里古墳群は石室の残存状態が悪いので、石室規模の数値も誤差が大きいかもしれないが、かなりのバラツキをもっている。比較的慶州に近い地域であるが、土壙墓や竪穴式石槨、横口式石室と主体部の形態もまちまちで、統一性がみられない。大型の石室の規模は慶州の古墳と匹敵し、古墳築造集団内の身分差が明確である。栄州の順興壁画墓や於宿知述干墓は長さよりも幅がかなり大きい形態で、他地域の古墳とは差異があり、この地域の独特な形態としてよいのであろう。

(5) 慶州における横穴式石室の受容と展開

慶州においては6世紀中ごろに百濟の影響を受けたと考えられる、長方形平面で平天井の横穴式石室が普門里夫婦塚や東川里瓦塚などでつくられる。前者は積石木槨墳（夫墓）に追葬されるかたちでつくられているが、夫墓からは山字形の金銅冠などが出土しており、この横穴式石室の被葬者がかなり有力な人物の婦人であったことが推測される。ここで石室の開口方向と屍床の位置に注目したい。石室は北西に開口しており、慶州での石室開口方向がほとんど南を指向していることを考えると異例である。さらに遺構実測図では明確ではないが、屍床は石室の長壁に沿って位置しているので、頭向きは東または西となる。ここで頭向きを東とするならば、平地における有力者の古墳の頭向きがほとんど東であることや、夫墓も東頭であることを考えあわせると、この婦墓も東頭を

意識して石室をつくったであろうことが推測される。

この6世紀中ころ以降、急激に前時代的な積石木榔墳から横穴式石室にとってかわるようになるのだが、その理由としては、埋葬に対するイデオロギーの変化が考えられる。精神的な面からみれば、それはやはり仏教の公認という事実が大きく関係するのは明らかであろう。しかし積石木榔墳での夫婦合葬による双墳や、夫婦単位の埋葬が行なわれていたことから、夫婦を追葬する横穴式石室墳へは比較的スムーズに転換していったのであろう。また、真興王による高句麗、百濟への侵入により、これまで比較的閉鎖的であった新羅の政治や文化において、いわゆる国際的な視野がひらけてきたことから、薄葬思想という当時東アジア全体に広まっていた思想が受容されたことも、石室導入の大きな要因と考えられる。

6世紀後半になって忠孝里古墳群でみられるような、B類の片袖式石室もつくられるが、それとほぼ時期を同じくして、両袖式石室で屍床が主軸と直交して設置される石枕塚や西岳里古墳などのC類も登場する。これは石室の南開口と東枕が要求されていたからであって、慶州の自生的な形態であり、甬道の設置や天井構造、石扇、石枕などには高句麗や百濟の影響がみられるにしても、それらの細部構造がある程度漸移的に変化していることから、慶州において発展したものと考えられる。つまり6世紀後半には石枕があらわれ、石扉は7世紀前半、甬道は7世紀中葉にそれぞれあらわれて、後に統一新羅時代を通して、形態変化を伴いながら常に石室構造の一要素として存続していく。

C類が定型化するに伴い、7世紀中葉ころには他のA類やB類の石室は次第につくられなくなる。またこれまで調査されたC類石室はいずれも規模が大きく、他の石室とは格差がみられる。このことはC類石室の優位性を示し、7世紀中葉以降では古墳に葬られる人がさらに限定されてきたとも推定される。慶州の西郊外にある新院里古墳群の調査では6世紀後半ころの小型の横口式石室や堅穴式石榔などが検出されているが、いずれも慶州市内でみられる古墳とは比較にならないほど小規模である。土器も装飾性に乏しく、上述したような日常用土器と思われるものがほとんどである。このように階層差をこえて古墳をつくり、土器等を副葬した習慣も、どうやら7世紀中葉になると消滅してしまうようである。7世紀中葉は新羅が高句麗や百濟を滅ぼして半島を統一した時にあたり、これまでの比較的緩やかな支配体制から、強力な王権社会へと大きな政治的転換が行なわれたものと考えられる。

その後8世紀前半には、陶俑が出土した龍江洞古墳、8世紀後半ころに推定される九政洞方形墳や伝神德王陵、9世紀ころとみられる獐山土偶塚などがつくられていく。その間絶えず唐の影響を強く受けているが、石室の形態は基本的に全く変わらない。おそらくは新羅王陵はほとんどこの種の横穴式石室を主体部としていると考えられ、非常に限定された身分のものだけが建造することのできた墓であったのだろう。ただし慶州市街の周辺に巡る山地には多くの横穴式石室墳が分布していることが知られているが、実態はまったく不明である。存続時期や内部形態など気になる点が多い。仏教思想の浸透によって、火葬墓が盛行するのとは対照的に、石枕の設置によって遺体を直に安置する方法をとっていたことは、支配層が伝統的な葬法にこだわっていたことを示しているだろう。

慶州の南約40kmに位置する蔚州では温山古墳群が6世紀中葉より、また華山里古墳群が6世紀後半より横穴（口）式石室を作りはじめ、7世紀後半までみられる。しかし方形平面をもった、やや規模の大きい石室は7世紀前半のうちでほとんど作られなくなり、それ以降は長方形の小規模な石室が作られるのみで、古墳数も激減してしまう。なお華山里ではこれら石室墳と混在して、土壙墓も連続と作られていることは注目される。付近の包含層から5世紀中ごろの古新羅期の土器が出土していることから、この時期には土壙墓の築造が始まっていた可能性がある。蔚州では5世紀後半から6世紀前半に比定される積石木櫛墳がつくられており、もともと新羅の勢力圏内に組み込まれている地域なので、この地域の墓制の動静が、慶州におけるそれを反映していることは、容易に想像しうる。石室規模をみるとかなりのばらつきをもっているが、慶州に比べると全体的に規模は小さく、また副葬品も貧弱であるといえる。蔚州では從来から大規模な古墳は築かれておらず、新羅が勢力拡大を図る6世紀後半以降も、それほどの政治的変動もなく、慶州の墓制と連動して蔚州における墓制も変化していると考えられる。7世紀後半になると石室の築造が衰弱するのは、慶州においてのA、B類石室がつくられなくなる現象と似ている。慶州周辺の古墳群は調査された例が少ないので、今後の調査例が待たれるが、おそらくは蔚州と様相を同じくすると考えている。

3 伽耶における横穴式石室の様相

(1) 従来の研究

伽耶故地においては陝川地域を中心として、横穴式石室の調査がまとまって行なわれている。しかし近年成果が続々と発表されている段階であり、研究自体はそれほどすんでいないといえるだろう。曹永鉉は洛東江西岸地域の石室をおよそ池山洞式、水精峰式、三山里式の流れの中でとらえ、それぞれ系譜が明らかでないもの、堅穴式石櫛の伝統の上につくられたもの、百濟の宋山里式から発展したものと規定した。

東潮は高靈の石室を「宋山里型」の変形とし、晋州の石室を洛東江東岸の堅穴系横口式石室や百濟の石室の影響をうけて、堅穴式石櫛墳から発展した形態とした。6世紀前半に百濟とくに全羅南道との関連から晋州で石室がつくられ、562年の大伽耶滅亡までの時期につくられた石室は、隣接する百濟との関連が深いとされるが、その後は新羅的な横穴式石室（方形で穹窿状天井）が成立し、新羅との政治的從属関係が浸透した結果と考えた。

以上からみると、慶尚道ではもっとも早く晋州で横穴式石室がつくられたが、これは堅穴式石櫛に百濟の影響をうけて模倣がつけられたものであること、亭浦里古墳群や高靈などでは6世紀前半ころに横穴式石室がつくられるが、百濟地域の影響を強くうけていること、562年の大伽耶滅亡後は新羅の影響が強くなること、などは共通認識となっているようである。

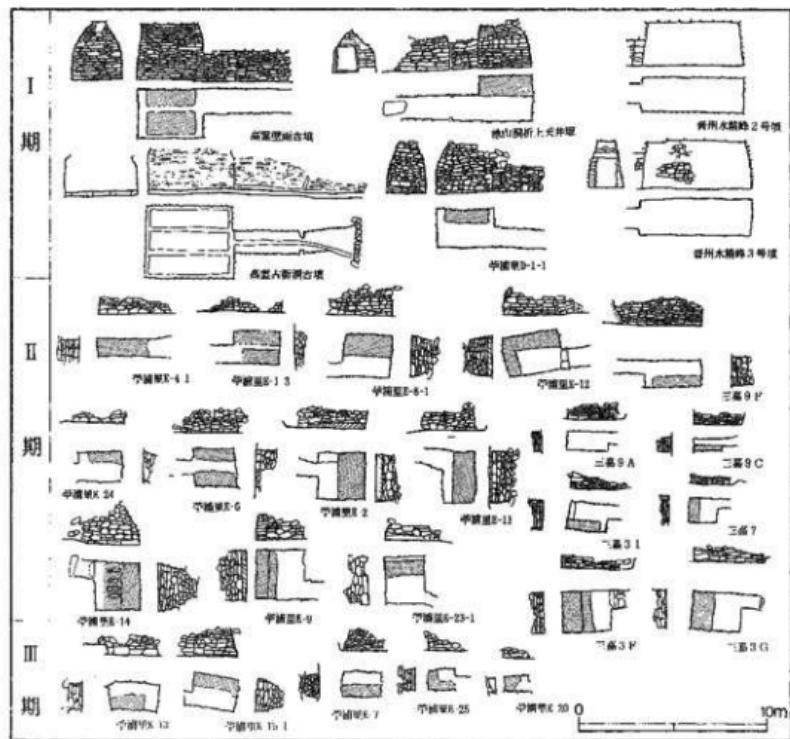
(2) 横穴式石室の分類（第4図）

晋州水精峰古墳などでみられる長方形両袖式の石室は特異な例であり、この地域独特の形態をもっている。最近調査された古墳にもこの形態の石室があり、類例は多く分布しているようである。系譜としては、上述のように伝統の堅穴式石櫛に横口をつける発想が結びついたものと考えられて

いる。全羅南道の、たとえば海南月松里造山古墳のような両袖式の石室との関連を認めるべきであろう。

高麗の石室には、片袖式や両袖式で、天井形式も折天井やトンネル形などがあり、細部をみるとそれぞれ異なった形式をもっているが、いずれも宋山里古墳群の穹窿状天井古墳の変形と考える。新羅的な色彩がみられず、他の伽耶地域の古墳と比較しても格段に規模が大きい石室であるので、後述する出土土器の検討とあわせて、年代的には新羅に征服される以前の築造と考える。

苧浦里古墳群で多くみられるのは方形平面で両袖または片袖のもの、長方形平面で片袖のもの、小型石室で袖の無いものなどである。方形平面のものには屍床を主軸に直交させる場合が多く見られるが、これは新羅の影響かもしれない。しかし後述するように直接的には新羅の強力な圧力による造営を考えるよりも、百濟のたとえば南原草村里古墳群などの石室の流れで考えたほうが無難であろう。この状況は三嘉古墳群でも同様である。6世紀前半につくられた苧浦里D-1-1号墳は片袖式の穹窿状天井をもつ形態で、明らかに百济宋山里古墳群の影響を受けている。このように陥



第4図 伽耶における横穴式石室の変遷

川地域を中心とした伽耶地域の横穴式石室は、石室構造や規模、遺骸の安置方法などには規格性がみられない。

(3) 横穴式石室から出土した土器（第5図）

苧浦里古墳群の横穴式石室から出土する土器について、大きく次のような流れをとらえることができる。

I期 在地的な高靈系土器が中心となる時期

II期 短脚高環と付加口縁壺が中心となる時期

III期 高環が減少して高台壺が増加し、多くの土器に印花文が施される時期

苧浦里E地区の調査報告書では、詳細な土器編年を行っているが、ここでは細かい分類は混乱をもたらすので省略する。具体的な年代を示すと、I期は晋州や陝川、高靈で石室が作られはじめの6世紀前半から中葉を中心とする時期、II期は伽耶が新羅によって征服された6世紀後半から7世紀中葉、III期は高台壺に施される印花文の手法から、7世紀後半から8世紀に該当すると考えられる。

また有蓋高環を脚の形態によって、蓋をつまみおよび「かえり」の有無によって次のように分類する。

有蓋高環--脚がおおよそ2段で凸帯をもつもの（A類）

脚が短く1段で、凸帯をもたないもの（B類）

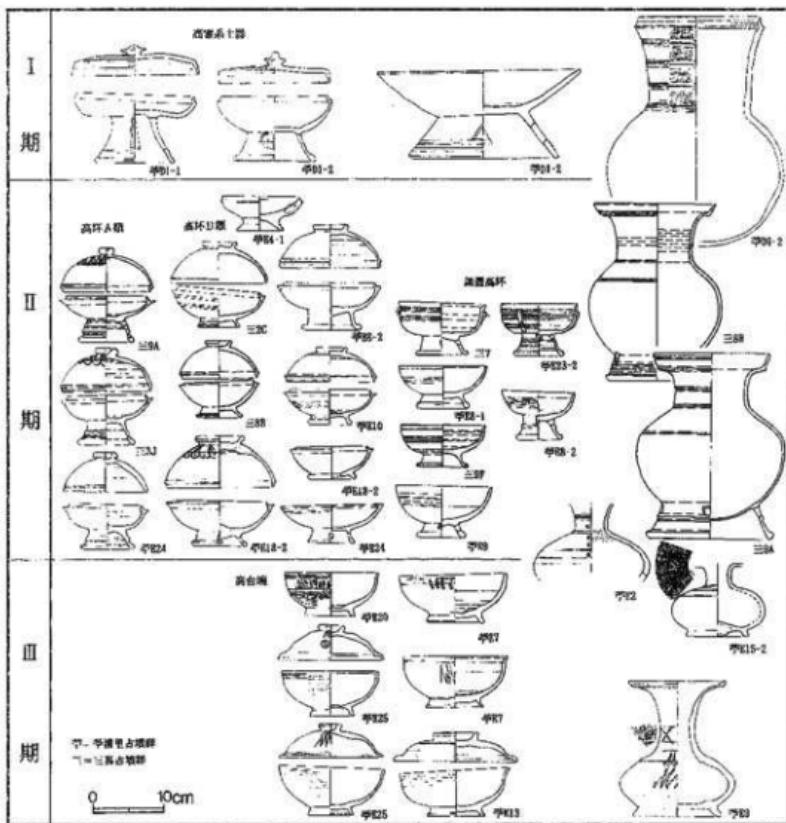
蓋 一帯が狭く上端部が開き、丸くおさめたボタン状のつまみをもつもの（A類）

幅が広く高台状の低いつまみをもつもの（B類）

「かえり」をもつもの（C類）

苧浦里古墳群での土器の様相を概観する。I期では全体的に高靈の要素を多く残すが、横穴式石室をつくるのはごく少數で、同時期の古墳はほとんどがまだ堅穴式石槨墳である。II期になると土器様相は一変する。E地区から出土した土器の組成をみると、有蓋高環B類と蓋B類が主流となって、ほかに焼や細頸壺がセットとなるものが多く、洛東江東岸で主流であった高環A類や蓋A類はほとんど出土していない。付加口縁長頸壺も稀である。III期になると高環が激減し、かわって高台壺と蓋C類が主流となる。高台壺の口縁部は次第に外反する。陰刻による施文はII b期でもみられるが、スタンプによる施文がIII期以降盛行する。なお宮川禎一によると、7世紀中葉ころに慶州では「継長連続文」の印花文が出現して、以後の文様構成の主体となるのであるが、苧浦里から出土した高台壺に施された印花文は後出的である。慶州で多くみられる同心円文形や馬蹄形のものは、現在のところ出土していない。とくに苧浦里E地区7号墳や25号墳で出土した高台壺や9号墳周辺から出土した長頸壺には、ジグザグの列点文が施されているが、これは宮川の言う「C手法」に相当し、8世紀前半代のものと考えられている。このことは陝川地域への印花文を中心とした施文方法の伝播がやや遅れたことが想定される。

また洛東江西岸でもっとも早く横穴式石室をとりいたとみられる、苧浦里E-1-1号墳と同一墳丘内につくられた1-1号石槨からは、高靈系蓋の最末期形式のものと、高環B類、蓋B類



第5図 岐川の横穴式石室から出土した土器の編年

(やや古式な觀がある)が共併しており、高靈系土器の終末とともに、高坏B類が岐川地域には登場していたことが明らかである。(第1表)

三嘉古墳群ではやや様相が異なる。II期当初は有蓋高坏B類と、蓋B類が主流となるのは同じであるが、次第に有蓋、無蓋高坏A類や蓋A類が主流になっていく。これは堅穴式石槨から高坏B類が多く出土すること、2-C号墳からは高靈系の蓋と共併していること、もっとも新しいと考えられる火葬墓3丁号墳からは高坏B類や蓋B類が全く出土していないことなどから、高坏B類→高坏A類への変化が説明できよう。付加口縁長頸壺は芋浦里に比べ多く出土し、細頸壺はまったく出土していない。このようにII期の早い段階で有蓋高坏B類、蓋B類が主流をなすことは芋浦里、三嘉古墳群とも共通しており、一方洛東江東岸地域での、高坏A類が盛行し、高坏B類が後出する現象とは全く異なる。(第2表)

第1表 岐川亭浦里古墳群E地区から出土した土器

番号	主 体 部	高 坏 高 坏	蓋 蓋	壺 壺	盞 盞	口 口	凸 凸	凹 凹	その他
4-3	横 口 式	1	1						
5-1	横 口 式	1	1						
15-2	竪穴式小石室	1		1					
18-2	竪穴式小石室	1		1					
22-1	横 口 式	1							
22-2	竪穴式小石室	1	1	1		2			
8-1	横 穴 式	1	1	1		2			1
8-2	竪穴式小石室	1	1	1		2			
9	横 穴 式	1	1	1		2			
24	横 穴 式	1	1	1		1			
23-2	竪穴式小石室		1			1			
6	横 穴 式		1			2			1
2	横 穴 式	2	9	2	2	1	1		台付短頭壺
11	横 穴 式			2					
13	横 口 式			3			1		
20	横 穴 式		1			1			
25	横 穴 式		3			4			

第2表 岐川三嵩古墳群から出土した土器

番号	主 体 部	高 坏 高 坏	蓋 蓋	壺 壺	盞 盞	口 口	凸 凸	凹 凹	その他
1-D	竪 穴 式	4	4	1					
1-E	竪 穴 式	2	2						1
2-C	竪 穴 式	4	4						
3-C		2	2						1
3-H	竪穴式小石室	1							2
8-B	横 穴 式	2	1	1	1				
2-E	竪 穴 式	4	1	4	1				
3-A	竪 穴 式	4	1	4					
8-C	横 穴 式	2	4	2	1				
9-F	横 穴 式	4	13	3	7	13	3		1
3-F	横 穴 式	1	1	2					1
3-J	竪穴式小石室	3	1	4					2
9-A	横 穴 式	2	1	2	1	1			1
7		1	1						

また付加口縁長頸壺は慶州で発展した土器であることは前述したが、岐川地域では高麗系土器が盛行している段階で、すでに倉里古墳群で副葬されている。新羅土器が伽耶滅亡以前にも流入していたことがわかる。しかし洛東江東岸でみたような土器セットの主流とはならないようである。

ここで横穴式石室から出土する高坏について、次のような流れを考えることができる。

高坏A類は2段の脚で中央に凸帯を巡らすものであるが、これは慶州の積石木椁墳で大量に出土する2段高坏と系譜上直結するもので、蓋A類のつまみも、透かしのあるつまみをもつ慶州的な土器からつながり、中心的な分布地域は洛東江東岸、すなわち新羅によって早い段階（5世紀代）から被支配地域となったところと考えられる。

高坏・蓋B類は、洛東江西岸を中心として分布しており、金海や釜山にも及んでいる。また慶州市内でも皇龍寺の整地層から出土しているが、古墳からは今のところまったく報告されていない。しかし西郊外の新院里古墳群で多く出土し、高坏A類からB類への変化が報告されているのである。岐川ではII期の当初から、すなわち高麗系土器が大きく変化する段階であらわれていて、しだいに高坏・蓋A類の比率が増加するような傾向にあり、高坏A類とB類の展開過程が全く逆の現象を示

している。これはどのような理由からか？ 高坏・蓋A類とB類が異なる系譜をもっているとする
と、A類は慶州中心にB類は陝川またはその周辺を中心に分布範囲が拡散していくことを指摘でき
る。そしてII期後半になるとそれぞれの土器が混在し、次第に統一化されていくのである。これが
III期に土器の様相がまったく統一される前段階としてとらえられよう。つまり高坏A類は慶州にお
いて、前時代の高坏から発展したもので、高坏B類は陝川あるいはその周辺地域で発展したものと
考えられる。では高坏B類はどのようにして発生したのか。陝川であれば百濟との関係を想起させ
るが、この時期の百濟の土器のなかでこのような高坏は今のところ知られていない。形態は、脚や
坏部の立ち上がりをみると、やはり慶州の土器の影響と考えるほうが妥当であろう。しかし、蓋B
類のつまみに関しては、百濟の三足土器の蓋に近い形態のものがみられ、百濟の影響も考えておき
たい。新羅や百濟の影響をうけて、陝川あるいはその周辺で独自に成立した形態であろう。II期の
後半になると次第に高坏A類・B類は混在するようになり、地域性を認めることができなくなる。

しかしIII期になると高坏はほとんどみられなくなり、変わって高台塊が登場する。これは無蓋高
坏から変化したとも、昌寧桂城A-1号墳や慶州月城路カ-15号墳などでみられる有蓋台付塊から
変化したとも考えられる。いずれにしても苧浦里でみられる高台塊の印花文は、慶州ではすでにあ
る程度発達した段階のもので、7世紀後半代以降になって陝川でも使用されたものと考えられる。
この時期に陝川において、土器構成の大きな変換が行われたことは、いうまでもなく新羅の半島統
一と関連して、土器文化でも統一化が行われたのであろう。

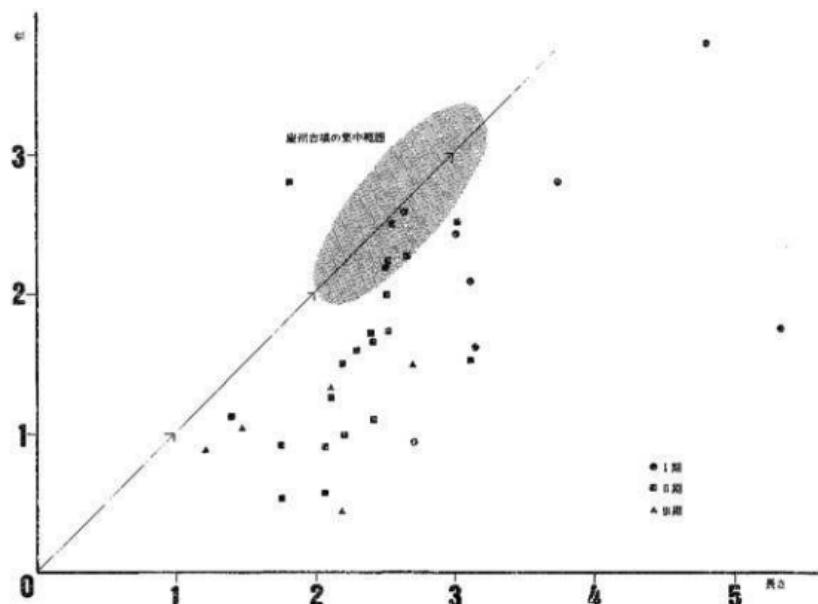
(4) 石室規模の比較（第6図）

苧浦里E地区古墳群と三嘉古墳群の石室を中心にして、石室の規模を比較してみたのが、第6図
である。平面形態からも正方形に近いもの、長方形のもの、小型のものなどに分けられるが、いず
れの古墳群の石室も、長さは約3m、幅は約2.5m以内の範囲でおさまっている。しかしそれぞれの
古墳で規模にバラツキがあり、慶州市内の古墳のように集中した状況はみられない。この図で高靈
の池山洞折上天井塚や壁画塚、古衙洞古墳などと比較すると、池山洞のものはそれほど規模の突出
性がみられないが、壁画塚や古衙洞古墳が苧浦里などの石室と比べると、かなり大きな規模をもつ
ことがわかる。これは高靈が大伽耶の中心地であることを考えると、大伽耶滅亡以前の支配勢力に
よってつくられたものと想定できる。

I期の石室は規模が大きく、II期は圧倒的に数が増えて、石室規模もバラツキが大きいが、I期
に比べると全体的に小さくなる傾向がある。III期では数が激減し、石室の規模もかなり小型になっ
てしまう。

(5) 伽耶における横穴式石室の受容と展開

晋州では6世紀前半には百濟全羅南道に分布する横穴式石室の影響を受けて、従来の堅穴式石槨
に横口を取り付けた形態が成立した。副葬品にも銅鏡や蛇行状鉄器などに百濟的な要素を認める見
解がある。しかし、これはごく地域的な普及にとどまり、同形態の石室は他の地域ではつくられて
いないと考えられる。いつまで継続するかは不明であるが、おそらく大伽耶が新羅に滅ぼされる時



第6図 陝川の横穴式石室の規模

期の前後（6世紀後半）ころまではつくられていたものと考える。

高蓋の横穴式石室は、前述したようにさまざまな形態をもってはいるが、いずれも宋山里古墳群の影響を受けているであろう。時期はその宋山里古墳群が全盛を極めている6世紀前半ころには、大伽耶の中心地高蓋の首長層に受け入れられたのである。いずれの石室からも土器の出土はみられないで、時期の設定は非常に難しい。古衛洞壁面古墳の封土内からは高蓋系土器の蓋や壺などが出土しているが、それよりは新しい時期となる。おそらくこれも大伽耶滅亡の時期には断絶したものと考えてよいだろう。

土器縦年I期の横穴式石室としては、他に芦浦里C-1号墳、E-1-1号墳などが知られる。いずれも片袖式で百濟的な様相をもつ。同じ陝川でもこの時期は竪穴式石槨が主流で、横穴式石室は極少数であり、とくに卓越した地位の者だけが築き得た墓であった。これらは百濟との交渉などによって、次第に首長層より横穴式石室が浸透してきたのであろう。これが一般的にならなかつたのは、高蓋の池山洞古墳群などにみられるように、卓越した地位の人物が存在し、彼らによって独占されたからであり、古墳の内容自体にもかなりの格差をもっているものと考える。土器については、この時期からすでに新羅的な付加口縁長頸壺や百濟の三足土器なども出土しているので、新羅や百濟との交流は当然もっていたと考えられる。しかし中心はあくまでも高蓋系土器である。

II期になり、土器の様相が一変すると同時に、横穴式石室も大いに普及することとなった。石室

の構造には統一性がなく、百濟の南原あたりから、自然流入的な形で造られるようになった形態ではないだろうか。この大きな変化は562年の大伽耶滅亡を契機としていることは間違いない。新羅に支配されたとはいっても、慶州でみられる石室とは直接はつながらない。この時期の爆発的な石室の増加は、土器文化の変化とともに新羅による大伽耶の支配が大きな要因であることには違いないが、新羅の支配力がそれほど強く入りこんでいなかったのであろう。それは慶州から離れているためか、あるいは在地集団への懷柔策であるのか。苧浦里古墳群の副葬品の中に帶金具が含まれていたり(帶金具が律令を基礎とした身分的指標と考えるならば)、高靈や晋州など前時代にとくに有力な集団がいたところでは、6世紀後半以降、横穴式石室を主体とした古墳群がみられないことから、おそらくある程度の新羅による在地有力層への権力の抑制政策があったのであろう。またII期になってから新たに墓域を開拓し古墳を築いたという例がなく、ほとんどは前時期から継続した墓域内に古墳をつくりつづけているのである。これにより、新たな勢力が入りこんで古墳を築いたということではなく、既存の集団が平和的に墓制を変化させている状況がみてとれる。ここで強調しておきたいのは、新羅の支配が決して一方的な血なまぐさいものではなく、文化的な融合をも図りながら進められていったということである。

しかしIII期になると、古墳の減少、規模の縮小、土器の統一など、支配力の強化が顕著になってくる。これは新羅による半島統一によって、これまで比較的柔軟な支配体制をとってきた旧伽耶地域に対しても、生活面にまでおよぶ強力な支配へと変化したものと考えられる。現在のところ、百濟や高句麗における7世紀後半以降の古墳は確認されていない。このように被支配地域では古墳を築くことができなくなり、伽耶故地も同様であった。律令をもとにして徹底した中央集権的支配を確立していった統一新羅の王權は、自らとその一族のための墓制として横穴式石室を保持していくことになる。

なおこれまで主に高靈や陝川を中心として、洛東江西岸地域について述べてきたが、ここで伽耶故地とされる洛東江東岸地域についても簡単に見ておきたい。金海を中心とする金官伽耶は最終的には532年に滅亡したとされるが、川をはさんだ釜山地域同様、5世紀代には新羅の影響を受けた文化をもっている。しかし大成洞や福泉洞などでみられるような大規模な古墳が築造されており、新羅とは隔絶した地位を保っていた。しかし6世紀になると大規模古墳はつくられなくなり、徳川洞古墳群のような小型の石室墳が群集して築かれるが、前代に比して古墳の数そのものも激減していると考えられる。なお金海礼安里古墳群では7世紀代にも、小規模ながら連続と古墳がつくられているが、帶金具などの副葬品が新たに現われることから、新羅勢力にある程度認められている、在地勢力の古墳であると考えられよう。これは陝川とも共通する点である。このような在地集団がどの地域にも存在する可能性はある。

また大邱や星州、昌寧などの支配者層の墓には、5世紀代からいわゆる竪穴系横口式石室が採用されている。これは追葬などの機能を目的としたものではなく、本論で述べている横穴式石室とは形態的に異なるので、これらの竪穴系横口式石室が新羅や伽耶の横穴式石室の受容にどのような影響を与えているのかなどは、今回は考察から除外しておきたい。しかしこの地域でも7世紀代の古墳が今のところあまり知られていないのは、金海・釜山の状況と類似する。

これらは明らかに新羅の支配が強力に及んだ結果であり、早々にして慶州中心の政治体制に組み込まれたのであろう。

4 結 語

以上、横穴式石室墳が比較的まとまって調査されている慶州と陝川を中心にして、出土土器の再検討を交えながら、新羅や伽耶において横穴式石室がいつ受容され、どのように展開していくかについて概略を述べてきた。ここでまとめておきたい。

①慶州では6世紀中葉ころからつくられるようになるが、伽耶ないし百濟の影響を受けてはいるものの、普門里夫婦塚のように当初から東枕を意識しており、慶州における墓制の伝統が取り込まれている。この積石木椁墳から横穴式石室への変換は急激であった。次第に石室の形態は両袖式方形穹窿状天井となり、遺体を主軸に直交させて安置する方法が定着する。それとともにこの形態の石室の優位性が確立し、ごく一部の階層の人々のみに限定された墓制となった。

②伽耶における横穴式石室の受容は6世紀前半まで遡るが、大伽耶滅亡(562年)以前では百濟の影響を強く受けている。しかしこれは各地域の有力集団によって、個人的に受容されているもので、広く普及するには至っていない。ほとんどの古墳が伝統の竪穴式石室であった。大伽耶滅亡後は横穴式石室が主流となり、墓制に大きな転換がみられる。百濟との国境に近い陝川では、從来より古墳が多くつくられていたところだが、その後も7世紀まで古墳がつくられる。しかし大伽耶の中心地高靈では、滅亡後には横穴式石室はほとんどつくられていないようである。

③横穴式石室から出土する土器の中で、器種構成や高坏の形態に、ある程度の地域性がみられることがわかった。しかしそれらは慶州の土器文化を中心としながらも次第に融合しあい、7世紀後半には土器の統一化に達したとみられる。

④この土器統一化の傾向に伴って、横穴式石室や古墳そのものの築造も下火になっていく。7世紀後半以降は慶州以外の地では、追葬を除いてほとんどつくられない。しかしこれと期を一にして①でみた「慶州王陵型」ともいべき、方形穹窿状天井石室が定着していくのである。

以上のことから、次のような政治的背景を想定した。

百濟に遅れること100年で、新羅(慶州)に横穴式石室が一挙に普及するようになったのは、百濟や高句麗、中国などとの接触により、国際的知見を得て、仏教的思想観や薄葬意識が上層階級に広まることによる。從来の積石木椁墳による埋葬とは大きく変化しているにもかかわらず、横穴式石室への転換が急激に行われているのは、やはり政治的な規制力がはたらいているものと考えられる。慶州の石室が受容早々に規格化されていることが、それを物語る。

新羅は532年に金官伽耶を中心とする地域を滅ぼし、また562年には高靈を中心とする大伽耶を滅ぼして、伽耶地域全体を支配下に置いたという。洛東江西岸の伽耶地域の土器文化をみると、6世紀中葉から後半にかけて新羅に支配されるようになった時期では、それぞれ新羅の影響をうけて、それまでの土器文化とは異なる新たな様式をつくりあげたが、未だ独自的なレベルを越えていないようである。横穴式石室(横口式石室もふくめて)が伽耶における伝統的な墓制である竪穴式石室に取って代り、中心的な墓制となるのであるが、石室の形態や規模などに統一性や規格性がない。

このように6世紀後半段階では新羅の支配程度はそれほど強固ではない。洛東江西岸を中心とした伽耶地域において、大伽耶滅亡後に横穴式石室が多く作られるようになるのは、新羅による石室築造の指導とともに、大伽耶勢力の滅亡によって從来の規制力が緩和されたためであろう。新羅の伽耶地域の支配は、決して強圧的で一方的なものではなく、文化的な融合を行いながら、各地域の独自性をある程度温存させていたようである。

しかし7世紀中ばを過ぎると、印花文を代表とするように、土器の統一性がみられ、それに伴って伽耶故地においては次第に古墳がつくられなくなっていく。洛東江東岸でも7世紀中ころ以降のまとまった古墳は、今のところ調査報告されていない。慶州ではA・B類の石室が下火になるが、方形穹窿状天井の「慶州王陵型」が盛行するようになり、7世紀後半ころからは十二支像を副葬または古墳の周囲に巡らしたり、石人を古墳の前に並べたり、石室に彩色したりと、明らかに唐の影響を強く受けながら、特定の身分のもの、具体的には王族クラスのもののみが、横穴式石室を造ることができた。これはすなわち、從来の地方独自の政治体制を慶州中心の新羅勢力が包括して、ある程度の自主性を尊重してきたのではあるが、新羅が半島を統一し、まさに百濟や高句麗を支配しようとする7世紀後半段階になると、中央集権的な強力な國家の建設が必要となってきたことの結果であろう。これは中國で隋や唐が強大な國家を築きあげたことと大きな関係があり、この点では日本における天皇中心の政治体制の成立とほぼ同時期であることも注目される。

慶州市の周囲にある山地に分布する多くの古墳が、7世紀以降のものとするならば、古墳をつくることのできた階層は、慶州に住んでいて、墓域を慶州市周囲に設定されたのであろう。つまり中央集権体制の確立による、一局集中的な現象とも考えられる。主体部の内容も全く知られていないが、おそらくは石室の構造や規模などに厳密な規定があったのではないかと推察する。私としては中心的な古墳を除いては、7世紀後半には古墳の築造がほとんど行なわれなくなったと想定している。それは火葬の盛行とも関係するだろう。この問題に関しては、今後調査が行われることを期待するしかない。

本論では横穴式石室の受容、展開消滅から考えられる、新羅、伽耶の動向を示したものであり、文献の面からは、未だ勉強不足で論じることはできなかった。今後の課題である。

なお資料の収集では、定森秀夫、白井克也、吉井秀夫の各氏に大変協力をいただいた。厚くお礼を申し上げます。

参考文献（報告書類は割愛）

- 東潮 1987 「新羅於宿知述干墓聖塚墓に関する一考察」『東アジアの考古と歴史』上
1993 「朝鮮三国時代における横穴式石室の出現と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第47集
- 東潮・田中俊明 1988 「韓国の古代遺跡」1 新羅編
- 東潮・田中俊明 1989 「韓国の古代遺跡」2 百濟・伽耶編
- 伊藤秋男 1973 「韓國慶州古墳群における石室塚の編年について」『古代文化』25
1976 「韓國慶尚北道善山古墳群(1)慶州における石室塚の発生とその特質について(予察)ー」『南山大学人文学研究所紀要』5
- 禹順姬 1991 「横口・横穴式石室墓の土器に対する検討」『第5回釜山－九州考古学共同研究会研究発表資料』
- 江浦洋 1987 「日本出土の統一新羅系土器とその諸問題Ⅰ」「太井遺跡(その2)」
- 小田富士雄 1987 「対馬・北部九州発見の新羅土器」「三佛金元龍教授定年退任記念論叢！」
- 姜仁求 1993 「新羅の墓制変遷と紀年問題」『古文化談叢』30
- 金元龍 1985 「土器(新羅)」「韓國史論」15 韓國の考古学III
- 金宰賢 1991 「伽耶故地出土短脚高环に関する研究」『韓國上古史学報』7
- 洪清植 1991 「百济、加耶、新羅地域の横穴、横口式石室の型式と編年」『第5回釜山－九州考古学共同研究会研究発表資料』
- 崔秉鉉 1987 「新羅後期様式土器の成立試論」「三佛金元龍教授定年退任記念論叢Ⅰ」
1988 「新羅石室古墳の研究」『崇実史学』5
- 李永鉉 1990 「三国時代横穴式石室塚の系譜と編年研究－漢江以南地域を中心として－」忠南大学校大学院硕土学位論文
- 藤井和夫 1979 「慶州古新羅古墳編年試案－出土新羅土器を中心として－」『神奈川考古』6
- 宮川祐一 1988 「新羅陶質土器研究の一覧点－7世紀代を中心として」『古代文化』40-6
1993 「新羅印花文陶器変遷の画期」『古文化談叢』30

研究紀要 第11号

1994

平成7年3月25日印刷

平成7年3月31日発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社